



ドクター和の

長尾和宏（ながお・かずひろ）医学博士。東京医科大学卒業後、大阪第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「在宅医療から在宅診療を目指す」総合診療クリニックを開業。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。

僕の地元、兵庫県が誇れるものはいくつもありますが、宝塚劇場の存在は、その筆頭だと言えるでしょう。私が診ている患者さんにも親子三代にわたって熱狂的なファンという家庭も珍しくありません。そんなお家に今日往診に伺ったら、この方の突然の訃報に打ちひしがれていました…。

元宝塚歌劇星組の男役として人気を博した、俳優の峰さを理さんが、1月30日に東京都内の病院で亡くなりました。享年68。死因は、甲状腺の未分化がんと発表です。

甲状腺とは首の前側、咽仏の下あたりにある内分泌腺（ホルモンを分泌する臓器）です。ここから分泌される甲状腺ホルモンは、エネルギー代謝、自律神経や体温や脈拍の調節、はたまた

191 俳優 峰さを理



甲状腺の腫大を指摘されたことがある人は多くいるでしょう。バセドウ病や橋本病は有名です。しかし、甲状腺がんになる人はそれほど多くはなく、年間では人口10万人あたり12〜13人で、比較的若い女性に多いのが特徴です。

甲状腺がんにはいくつかのタイプがあります。9割の人は、乳頭がんと呼ばれるもので、進行が遅く、命にかかわることは、ほとんどありません。がん

と診断されても治療はせずに、経過観察のみで天寿を全うされる方も多くおられます。一方、「未分化がん」と診断された場合、事情は180度違ってきて

甲状腺がんのうち未分化がんと診断される人は1〜2%です。しかしこれに限っては大変タチの悪いがんで、周囲の臓器への浸潤や、周囲のリンパ節や

肺や骨などの転移がとて早いです。甲状腺がん全体の10年生存率は8割以上ですが、未分化がんに限ると、診断されてから1年以内に亡くなってしまう人も多くいます。

峰さんは昨年1月、肩にコブのような腫れを自覚。しかしコロナ禍で病院に行くのを躊躇（ちゅうちよ）したのか、がんの診断を受けたのは半年後の7月のことでした。それは峰さん自身のご判断なので、第三者が後から言っても仕方がないことです。しかし甲状腺の未分化がんに限って言えば、診断・治療の遅れが死に影響する可能性を否定できません。

もし彼女が「今検査に行ったら病院に迷惑がかかる」と一瞬でも考えたのであれば、とても悲しい事です。メディアは毎日のように医療崩壊と叫んでいますが、患者さんは、医療に遠慮は禁物です。コロナ禍でももし異常を感じたら遠慮なく「かかりつけ医」にご相談ください。

患者は医療に遠慮は禁物